

2024.12.6.

駒澤大学成道会記念講演

高祖の晩年を思う

木村清孝

序言

私の歩み 学生時代の学び—倫理学から印度哲学へ 四住期説への共感 自己存在の  
重心点の移動—悩める小僧から仏教思想史研究者へ 研究者と宗侶の間の往来と葛藤  
自ずから開けた道—止揚 (Aufhebung) の感覚

I. 十二巻本『正法眼蔵』をどのように受け止めるか

① 懷奘禅師の「記」から窺えるもの (資料1参照)

② 十二巻本『正法眼蔵』の基本的特徴

II. 「小参」における〈家訓〉の強調 (資料2参照)

III. 十二巻本『正法眼蔵』「八大人覺」の重要性 (資料3参照)

結語—高祖の「遺偈」に触れて—

三 本云建長五年正月六日書于永平寺

三 この写本のもととな  
じた本。恐らくは道元禪  
師の自筆本であろう。  
四 一二五三年。道元禪  
師入滅の年。

五 如建長七年乙卯解制の前日、令義演書記書写一畢。同一  
校之。

五 懷井の奥書。

六 如建長七年乙卯解制の前日、義演書記をして書写せしめ畢んぬ。  
同じく之を一校せり

六 一二五五年。道元禪  
師入滅後二年目。

右本、先師最後御病中之御草也。仰以前所撰仮名正法眼藏等、  
皆書改、并新草具都盧唐佰卷、可撰之云々。

七 夏安居の結制が解か  
れる前日。七月十四日。

八 仁治二年(三三)以来  
永平門下にあり、後に永  
平寺四世となる。書記↓

右の本は、先師最後の御病中の御草なり。仰せには以前所撰の仮  
名正法眼藏等、皆な書き改め、並びに新草具に都盧唐佰卷、之を  
撰すべしと云々

九 本山版はアブリギオモ  
ンミルニと訓む。  
一〇 すへて。

既始草之御此卷、当第十二也。此之後、御病漸々重増。仍  
御草案等事即止也。所以此御草等、先師最後教勅也。我等不幸  
不拜見一百卷之御草、尤所恨也。若奉恋慕先師之人、必  
書此十二卷、而可護持之。此釈尊最後之教勅、且先師最後  
之遺教也。

既に始草の御此の巻は、第十二に当れり。此の後、御病漸々に重  
増したまふ。仍つて御草案等の事も即ち止みぬ。所以に此の御草等  
は、先師最後の教勅なり。我等不幸にして一百巻の御草を拜見せず、  
尤も恨むる所なり。若し先師を恋慕し奉らん人は、必ず此の十二巻  
を書して之を護持すべし。此れ釈尊最後の教勅にして、且つ先師最  
後の遺教也

- 一 八大人覺卷。
- 二 次第に。センゼンニ  
(日葡)
- 三 特に。

懷井 記之

20解夏小参云、九旬無為、一衆安穩、雖為仏祖之護持、宛是大衆之慶幸也。永平今夜依例小参。言小参者、家訓也。

家訓雖多、是挙一二。謂、先代仏祖、皆是道心士也。若無道心、万行虚設也。然則参学雲水、先須發菩提心也。發菩提心者、乃度衆生心也。先須有道心、次須具慕古、後須求実。此是三種、即初心晚学之所学也。永平家訓、只是如斯。記得、世尊昔因自恣日、文殊三処過夏。迦葉欲擯出文殊、纔近椎、乃見百千万億文殊。迦葉尽其神力、椎不能挙。世尊遂問迦葉、汝擯那箇文殊。迦葉無對。大衆、要参究這一段因縁麼。先直須深信、安居過夏、仏祖家裏一大事因縁也、不可容易矣。且道、迦葉当初擯了文殊、未擯文殊。若道擯了文殊、尽其神力椎不能挙、又作麼生。若道未擯文殊、尽令而行、不可勞而無功也。大衆須知、迦葉若欲擯声聞縁覚・初心晚学、及十聖三賢等、迦葉必定挙槌也。今欲擯百千万億文殊、迦葉用不能挙之椎也。為甚如斯。不見道、千鈞之弩不為麤鼠而発、万斛之船豈於牛轍而行也。雖然如是、不涉這箇辺事、還有向上道処麼。良久云、太平王業治無象、野老家風似至淳、祇管村歌及社飲、争知舜徳及堯仁。大衆久立、伏惟珍重。

20夏安居を終える日の小参でいわれた。「九十日の間、何事もなく、大衆一同、みな安穩であった。これは、仏祖が護持してくださったからだ。だが、さながら大衆にとつて幸いなことだ。わしは今夜、いつものように小参を行う。小参は家訓である。家訓は多いが、ここに一、二を挙げよう。

先に世に出られた仏祖方は、みな道心の士である。道心がなければ、あらゆる行はみな虚しく設けられたものになってしまう。そうであるから、仏道を学ぼうとする雲水は、まずは菩提心を起こさなければならぬ。菩提心を起こすとは、衆生をさとの岸に渡そうとする心のことである。まず、道心がなければならぬ。次には、「古人を慕う」慕古の心を見えなければならぬ。第三には、真実(実)を求めなければならぬ。これら三種が、初心の者も晩学の者もともに学ぶべきところである。わが永平の家訓は、ただこれだけである。

こういう話がある。世尊の昔の話である。夏安居が終わり、大衆が罪を懺悔すべき自恣の日に、文殊(マンジュシュリー)が三箇所で夏を過ごしたことを知つて、摩訶迦葉(マハーカーシャパ)が文殊を追放しようと思ひ、そのことを知らせるために鍵椎に近づくと、百千万億の文殊が見えた。摩訶迦葉は「驚きながらも」自分がかもっている神通力を尽くして、その鍵椎を持ち上げようとした。ところがビクともしない。「それを見て」世尊は、ついに摩訶迦葉に尋ねられた。「君は、どの文殊を追放しようといふのかね」と。摩訶迦葉は、何も答えられなかつた、というのだ。

「師が〔さらに〕いわれた。」「大衆よ、この一段の因縁を参究したいか。まずは、「安居して夏を過ごすことは、仏祖の家における一大事の因縁である」ということを、ただ深く信じなければならぬ。安易に考えてはならないのだ。そこでだが、摩訶迦葉はその昔、文殊を追放してしまつたのか、まだ文殊を追放しないでいるのか、いつてみよ。もし文殊を追放してしまつたというのなら、神通力を尽くしても、鍵椎を挙げられなかつたのは、どういふことか。また、もしもまだ文殊を追放していないというのなら、「摩訶迦葉は」規律に則つて力を尽くしたのだから、その努力が何にもならなかつたというはずはない。大衆よ、このことを知らなければならぬ。摩訶迦葉がもしも声聞、縁覚、初心の者、晩学の者、及び十聖、三賢等を追放しようとしたら、必ず鍵椎を挙げられたはずである。今、百千万億の文殊を追放しようとして、摩訶迦葉は、挙げることができない鍵椎を用いたのだ。どうしてそんなのか。重量級の石弓(千鈞之弩)は、二十日鼠を射るためには使われないし、大型の船(万斛之船)は、決して牛車の轍の跡(にできる水たまり)を進まない、というではないか。こういうわけだが、この領域の事にわたらない、さらにそれを超えるところをいえるものだろうか。

しばらくしていわれた。「太平の時代の王政(王業)に、世を治める上で決まつた形はなかつた(治無像)。田舎の老人たちの家風は、いたつて淳朴なままのようだ(似至淳)。ただ、村の集まりでみんなが仲よく歌つて飲んでの「幸せな」毎日だ。舜帝の徳も堯帝の仁も、知るわけがない(争知)。大衆よ、長い間立つたままでお疲れさま。お大事に！」

(1) 以下の話は、『宏智広録』巻三、拈古(大正四十八、二七下)などに言及される。道元は、これにもとづいて引用したのであろうか。漢訳仏典類に、この話の典拠となるものがあるかどうかは、今のところ不明である。

(2) サンスクリット語のガンターの音写語。もともとは木製の鳴らし物の一種。詳しくは本書下巻・第六の四百四十二番の注(一)を参照。

(3) 二句のうち、前の「千鈞の弩」以下の一句は『三国志』巻二十三「魏書」杜襲伝に見えるものがそのまま用いられている。だが、これに続く「万斛の船」以下の句は、同伝では「万斛の鐘は差撞を以てしては音を起さず」で、まったく異なる。道元自身が作ったものであろうか。「牛轍」という熟語自体にも違和感があり、偽作、あるいは改作の疑いを拭いきれない。

(4) 以下の七言絶句は、宏智正覚が作った一つの頌『宏智広録』巻二「頌古」(大正四十八、一八下―一九上)に大きく依存する。すなわち、その頌とは、ある僧が「仏法の大意」を問うたのに対して、青原行思が「廬陵の米の値段はいくらするかね」と応え問答を挙げ、これに付けたもので、「太平の治業に像無し。野老の家風、至淳なり。只管、村に歌い、社に飲む。那、舜の徳、堯の仁を知らんや」という。道元は、この六言四句からなる頌を七言絶句に調えるために少し手を加え、「向上」の境位の様相を詠い上げようとしたのであろう。

十二卷正法眼蔵……………三

第一 出家功德……………五  
 第二 受戒……………一〇  
 第三 袈裟功德……………一七  
 第四 發菩提心……………一七  
 第五 供養諸仏……………一六  
 第六 歸依仏法僧宝……………一五  
 第七 深信因果……………一六  
 第八 三時業……………一五  
 第九 四馬……………一〇  
 第十 四禪比丘……………一〇  
 第十一 一百八法明門……………一七  
 第十二 八大人覺……………一〇

仏言、汝等比丘、常当一心勤求出道。一切世間動不動法、皆是敗壞不安之相。汝等且止、勿得復語。時將欲過、我欲滅度。是我最後之所教誨。

《仏言はく、汝等比丘、常に當に一心に勤めて出道を求むべし。一切世間の動不動の法は、皆な是れ敗壞不安の相なり。汝等且く止まね、復た語ること得ること勿れ。時將に過ぎなんとす、我れ滅度せんとす。是れ我が最後の教誨する所なり》

このゆゑに、如来の弟子は、かならずこれを習學してまつる。これを修習せず、しらざらんは仏弟子にあらず。これ如来の正法眼蔵涅槃妙心なり。しかあるに、いましらざるものはおほく、見聞せることあるものはすくなきは、魔嬭によりてしらざるなり。また宿殖善根のすくなきもの、きかず、みず。むかし正法・像法のおひだは、仏弟子みなこれをしれり、修習し参學しき。いまは千比丘のなかに、一兩この八大人覺しれる者なし。あはれむべし、薄季の陵夷、たとふるにもなし。如来の正法、いま大千に流布して、白法、いまだ滅せざらんとき、いそぎ習學すべきなり、緩怠なることなかれ。

仏法にあふたてまつること、無量劫にかたし。人身をうるごと、またかたし。たとひ人身をうくといへども、三洲の人身よし。そのなかに、南洲の人身すぐれたり。見仏聞法、出家得道するゆゑなり。如来の般涅槃よりさきに涅槃にいり、さきだちて死せるもがらは、この八大人覺をきかず、ならはず。いまわれら見聞したてまつり、習學したてまつる、宿殖善根のちからなり。いま習學して生々に増長し、かならず無上菩提にいたり、衆生のためにこれをとかんこと、釈迦牟尼仏にひとしくしてことなることなからん。

四 世間を出離して涅槃に入る道。  
 五 やぶれ褻(む)れて安定することがない。  
 六 何かしようとするのをやめよ。  
 七 くり返し学ぶ。  
 八 修行をくり返す。  
 九 糖はモチアソブ、タラムレル。  
 一〇 宿世(前生)に善根をうえたこと。  
 一一 仏滅後五百年(又は千年)の間、仏の教・行・証のある時代を正法と言ひ、正法を過ぎて仏の教・行はあるが証のない時代を像法と言ふ。  
 一二 一人でも、二人でも。  
 一三 世が末になつて、高い陵(たかね)が低くなるように物事がおとろえること。  
 一四 三千大千世界。  
 一五 仏の説かれた教法。  
 一六 ゆるくし、怠る。  
 一七 須弥山を中心とする四方の世界のうち、東勝身洲・西牛貨洲・南閻浮洲。北洲は人の寿命が長く、快樂極まりないので発心することが少ない。

一 南閻浮洲。↓六頁11

二 何生にもわたつて。